

〈中本正智博士 著書紹介〉 『日本列島言語史の研究』

橋尾, 直和

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

91

(終了ページ / End Page)

94

(発行年 / Year)

1995-02-24

# 『日本列島言語史の研究』

橋 尾 直 和

本書は、中本正智先生の博士論文を刊行化したものである。列島諸言語を総体として考察し、一つの歴史的発展の中に位置づけることを目標としている。従来、諸方言は断片的に研究されたものが多く、列島の視野に立って研究されたものが少なかった。それに対し、本書は諸方言を個々の歴史的解明のみにとどまらず、包括的かつ有機的にとらえ、一つの言語史の流れをよみとることにより、「列島言語史」を構築しようと試みるものである。

その方法として、比較言語学と言語地理学を核に、意味論など多くの学問的立場から見出された原理を有機的に適用している。比較言語学の方法は、言語の内的変化に適用させている。この両方法を総合することによって、言語の歴史過程の全体像の解明が可能である、としている。

比較言語学的研究では、諸方言の音韻体系を明らかにし、諸方言間の音韻法則を探り、比較によってその変化過程を明らかにしている。また、言語地理学的研究では、多くの語彙項目について列島の諸方言を調査し、項目ごとに言語分布図を描き、その歴史的解釈として、分布の諸原則により、強分化圏と弱文化域の構図の中で行われている。

言語資料は、著者が1960年から列島各地をまわって、現地調査を実施して得られたもので、琉球列島をはじめとして、九州から青森までの主要地点を調査し、著者自らの耳を通して考察されたものである。

文献資料は、奈良時代以降の中央における文献のほか、琉球列島に残されている文献として『語音翻訳』（甲叔舟『海東諸国紀』中、1501年）、『琉球館訳語』（『華夷訳語』中、15世紀半ば）、『中山伝信録』（徐葆光、1721年）、『おもろさうし』（首里王府、1711年）などを用いている。

序章では、日本列島と琉球列島における文化的背景と言語的特徴を概観し、その全体像を地理的条件とのかかわりで浮き彫りにしている。

第1章では、列島言語研究の潮流と方法について論じている。列島における方言意識から説きおこし、現代言語学にいたるさまざまな研究方法を検討し、列島言語研究のための方法を探っている。内的変化に対しては、音韻法則や意味推移の原理を適用して、歴史的序列を推定し、例外的変化に対しては、言語分布の原理を適用して言語波及の歴史を追求している。このように、比較言語学と言語地理学の方法の適用すべき原理を岐別し、精密化させている。具体的に稲作語、蜻蛉、茸などについて分布図を描き、語源と伝播を解明するとともに、列

島言語史の可能性を探り、鋏などによって、文献語よりも古層の原日本語の祖形を探っている。

第2章では、列島言語研究の例として、琉球列島言語の研究し概要を示している。研究初期のものとしてチェンバレンの研究を取り上げ、興隆起のものとして伊波普猷の研究を取り上げて検討している。言語の概要として、琉球列島言語をめぐる諸問題を論じ、その形成に関わる文化的環境、地理的環境を考察し、その史的概観を示している。

第3章では、音韻の実態を明らかにし、その分布から歴史過程を推定している。母音については、列島全域の母音を対象にし、大きく東北方言のような、いわゆる中縮型と、近畿方言のような、いわゆるバランス型があることを論じている。奈良朝期の甲類乙類の音韻と関係づけるならば、東北方言は乙類に統合し、近畿方言は甲類に統合したものと捉えている。琉球列島の母音は、バランス型から派生したもので、高母音化現象によって変化した姿であることを明らかにしている。

子音については、ハ行P音の残存要因を諸方言の中から探っている。母音変化と連動して起こる音節間の統合を防ぐため、子音が変容して狭母音音節で喉頭化音が生じた。つまり、P音がpʔ/Pに分割された。宮古、八重山ではウ段音節で変容し、f/Pに分割された。このような複雑な音韻構造がP音残存を支える主要因となった。タ行音においても、母音変化と連動して構造的に変化していることを示している。

アクセントについては、沖縄中南部の首里を中心とする首里式アクセントと、沖縄北部から中南部の那覇に及んでいる那覇式アクセントのあることをてがかりに、琉球王国の成立を論証している。琉球列島のアクセント史の考察においては、沖縄本島の北部と中南部のアクセント対立を重要として、北部から恩納アクセントを、中南部から首里アクセントを例にとって比較し、北部式から首里式へのアクセント推移を明らかにしている。さらに、この推移過程に類似する現象が与論島方言にみられるため、これを細かに検討している。音声分析に当たっては、音響音声学的手法を用いている。

第4章では、動詞活用の構造が奄美と沖縄を含む北琉球と、宮古、八重山を含む南琉球で異なることを明らかにしている。動詞の終止形は、「連用形+居ム」から成るム系と、「連用形+居リ」から成るリ系が存する。ム系は琉球全域に存するが、リ系は奄美だけに存することが明確になった。従来、宮古、八重山の動詞の構造に「居ム」が参加しているかどうか疑問とされていたが、西表島の終止形kjun(来る)などにより、「居ム」がついて構成されたとみるのが自然である、としている。二段系活用の「起き」の「き」は、奈良朝期には乙類音節であるが、これが琉球において甲類音節と区別を保っていることが明らかになった。ラ行四段化が四段活用以外の動詞に及ぶが、奄美と沖縄に深く及び、次に八重山に及び宮古への及び方は浅いことが分布によって示されている。

第5章では、語彙の実態を構造的観点から分析し、その発達段階を考察している。食名語

については、朝食のアシー（朝飯、あさいひ）が食をとる時間帯として後方へ推移することから、食文化が2食制から3食制へと発展してきたことを論証している。支配層を示す「あち」「なさ」がそれぞれ、「吾父」「吾主」「汝主」から発達した語であり、列島の支配層を表す語が「親」から「父」「主」へ取って代わったことを明らかにし、言語の分析を通して支配層の変遷を推論している。

第6章では、おもろ時代の言語を資料とし、その分析を通して列島言語の発展段階が考察できることをしめしている。琉球における、平仮名を核として簡単な字画の漢字を混ぜて表記するおもろ表記を考察し、その源流を追及している。おもろ時代には、1語を表記するために、たとえば「雲」を「くも」とも「こも」とも表記する複用表記があることに着目し、これを利用して当時の音韻変化の過程を推定している。この表記から、当時、 $o \rightarrow u$  の変化が起こっていて、その影響でこのような複用表記がなされていた、としている。おもろ時代には、高音音化がすでに起こっていたのであり、 $k \rightarrow tʃ$  の口蓋化も起こっていたことを論証している。

また、海の彼方の理想郷とみなされ、琉球の信仰における独自の概念とされ、宗教や民族研究でしばしば取り上げられる、ニライカナイの語源を言語学的に論証している。ニライカナイの古形は、『おもろさうし』に対語として現れる「みるや」「かなや」であり、「み」が土を、「か」が日（太陽）を意味する。したがって、「みるや」「かなや」の語源は、「土の屋（\*miroja）」「日の屋（\*kanoja）」であり、太陽神の居所を示している。つまり、ニライカナイの原義は、日ごと現れては沈む太陽神の居所であり、地の底にあると考えられた。この原義が忘れられ、時代が下るにつれて、琉球列島の地理的条件によって次第に推移し、ついに「海の彼方」と考えられるようになった、と推論している。

第7章では、国語教育を通して、琉球列島の過去と現在の言語状況を論じ、将来の言語状況を推考している。これは、将来の言語状況を考えることも、列島言語史の重要な対象となると考えたため、としている。最後に、日本列島の言語についての研究状況を理解するために主要な研究文献の内容をたどって挙げている。

筆者の調査研究の成果は、随時、公にされ、『琉球方言音韻の研究』『琉球語彙史の研究』『図説琉球語辞典』として出版されてきた。本書は、すでに出版されたものと内容的に重複しないように配慮し、その後の成果を基盤に日本列島全域の言語の全体像について、諸側面から方法論を確立しつつ、その有機的な歴史過程を考察したものである。したがって、本書は『日本列島言語史の研究』として独立しているが、これをその総論、すでに出版されたものをその各論と位置づけることもできよう。筆者は、今後はさらに広範囲にわたる言語資料を集め、これを有機的に組織だてて列島言語史を体系化しなければならないであろう、と自序に述べられている。筆者の構想として、この先に「アジア言語史の研究」というものがあり、「本書はその序論にすぎない」、とおっしゃっていたことを記憶している。その偉業半ば

でこの世を去られたことは、悔やまれてならない。

(1990年 5月15日・大修館書店)

(高知女子大学助教授)



国内研究員マーチン・ホーダ氏（現千葉大学）のオーストラリア留学と比嘉実現所長のタイ留学からの帰国を記念する歓送迎会にて（左端中本先生、中央山本弘文先生、右マーチン氏）